



大学教員という仕事

森山 明子

武蔵野美術大学デザイン情報学科教授

1. はじめに——特許庁退職後のこと

「OB大学だより」に執筆するのにはためらいがありました。大学で知財教育を専門に担当しているわけではないのが第一の理由だったのですが、OB = Old Boyでもないのだし……といった言い訳もあります。特許庁入庁から退職までは11年3カ月ですが、退職出向期間が15カ月あって、弁理士の資格を取得しないままでの転職でした。転職先である出版社には11年8カ月在職し、現在の大学に着任して今年で7年目です。

編集者としてのキャリアの方が審査官より長いわけで、誌面にそぐわない記事は載せないという職業意識（?!）がこの欄への執筆を躊躇させました。私が籍を置いた日経マグローヒル社（現・日経BP社）はその社名から分かるように、アメリカ最大手の出版社だったマグローヒル社と日本経済新聞社が出資して設立した会社でしたので、米国流にすべての記事の読者アンケート調査の結果が統計的に処理され、それこそ通信簿のように号ごとに配布されました。その記事を読んだかどうか、読んで役立ったかどうか、1ページの記事であっても数値化されるのですから、記者の生涯打率を算出することも可能だったのです（信じられますか？）

けれど、最終的に寄稿依頼をお受けしたのもまた、編

集者という職業意識のせいだったかもしれません。会報誌とはいえ雑誌とはその名称のように、ある意味で豊富な情報を含む多様な記事で構成することが許される、と思うからです。この会報誌にはまさか読者評価はないでしょうが、いささか場違いなこの記事にしばらくおつきあいください。

学費を出してくれた親の手前、教員免許をとりはしましたが、教員になる予定はまったくありませんでした。それが巡り巡って研究・教育の場に身を置いています。与えられたせつかくの機会ですので、そのなりゆきも含め、教育一般とデザイン情報学教育について書いてみようと思います。

2. 小学生にとっての 経済学 と 教育学

最近、『経済ってそういうことだったのか会議』（佐藤雅彦・竹中平蔵、日経ビジネス人文庫、2002年）を遅まきながら読みました。エコノミクスの語源であるギリシャ語の「オイコノミコス」が 共同体のあり方 という意味だと知って感動した佐藤氏と、「つぎつぎ繰り出される、あまりに本質的な質問に、なんだか経済学の命運を背負っているような気になって、夢中で話をした」という竹中氏との対談本です。

文庫本となったこの対談の第1章に「牛乳瓶のフタ」の経済学 が置かれていて興味をそそられました。小学生の佐藤少年のまわりで牛乳瓶のフタを集めるブームが起こり、そのフタは交換価値をもつようになるのですが、牛乳屋の親戚がいる別の少年が何百枚かのフタを持ち込むことで熱が消える、といったエピソードです。竹中氏はその思い出話を、「さながら世の中の経済活動のミニチュアモデル、と言っていいほどですね」と評しています。

だれにも似たような経験があるのではないのでしょうか。経済学であれ、教育学であれ。私にとってのそれはまず田植えの経済学 でした。魚沼産コシヒカリ で知られる魚沼市（2004年11月に市制が布かれました）には私が小学生だった1960年代、春と秋に1週間ずつ、労働休暇がありました。田植えと稲刈りを手伝うための休暇です。コシヒカリがブランド米として騒がれるようになるずっと前、もちろん田植機が登場する以前のことでした。各農家は作業効率を上げるべく、人を雇って短期間に田植

えを終えるのがならいでした。小学生も人手としてあてにされ、報酬は大人、中学生、小学生とランクごとに取り決めがありました。

小学2年生の年、父親に連れられて知り合いの農家に田植えの手伝いに行きました。身長が120センチに満たないころですから、もちろん 見習い であり 付録 です。それでも一応はやり方を教えられました。早く、真っすぐ、しっかり が田植えの三原則。しっかり とは、苗が早く育つように浅く植え、なおかつ植えた後に水田に水を引き入れても浮き上がらないように根を広げてしっかり植えるという、矛盾しそうな難しい原則だったのです。

あくまでも見習いでした。ところが一端始めると、一緒に植える大人に遅れることはもってのほかだ と小学生ながら思い込んだのでした。その心理は思い出そうにも思い出せません。が、あんなに必死に頑張ったことは後にも先にもないほど精を出しました。そうして一日が終わると、思いがけない報酬が舞いこみました。その200円は、決められた小学生の相場と同額でした。

翌年からは一週間の休暇の計画が立ちました。2年目にして相場を上回る報酬をこっそり渡され、翌年の仮予約も成立するようになりました。予約が休暇日数を越えれば、待遇を比較して働く場を選ぶことも可能でした。これが 田植えの経済学 でなくて何でしょう。子供の世界では勉強の成績は人気には必ずしも結びつかないものですが、大人の世界では働きに応じて現在のみならず未来の報酬も得られる！ これは小学生の私にとって元気の出る発見だったのです。ただし、その報酬を何に使ったかは記憶にありません。消費経済は農村地帯の小学生にはまだ及んでいなかったのでしょうか。農作業の休憩時間に開く「少年サンデー」に、目隠しを拒否して射殺される当時ベトコンと呼ばれた少年のモノクロ写真が掲載されるような時代でした（年代は少しずれるかもしれませんが）今となっては、漫画雑誌で漫画よりもグラビアページの印象が強かったのが新聞社系出版社へ入社した遠因だったような気がします。

小学5年生になってはじめて男性の教師がクラス担当になると、グループ学習が取り入れられました。学力が平均化するよう6人6班編成で班長を決め、総合点を競わせるのが方式でした。テストのたびに、壁に張られた一覧表の棒グラフに合計点が加算されたような記憶がありま

す。そうしたテストがある朝（前日だったかもしれませんが）予測問題を作成して班のメンバー全員に配ったのは班長の私でした。正解を記入した用紙も準備しました。複写機のないころですから、5人分を手書きしたはずです。それがどのような 情熱 に基づく行為だったか思い出せないのですが、かすかに覚えていることがあります。上限のある自分の点数をわずかに上げるより、たとえば30点のメンバーの点数を70点に上げる方が総合点を上げるのにははるかに近道だ。そんな 戦略 を立てたようでした。

その結果、班ごとの競争には勝てるのですが、学力の平準化を目して学期ごとに班構成は変わるわけですから、班員が変わるごとに何度も同じことを繰り返しました。変動相場制のようなものと言えるかもしれません。それ



学生課題作品「校内の自然」から
「三角の空—9号館4階喫煙所」（関康仁）

を石を積み上げては崩す シジフォスの神話 のように感じていたか、常に フロンティア があるように思っていたかは覚えていません。いずれであったとしても、担任の教師にとっては狙いどおりの教育の 先兵 のようなものではあったでしょう。班を同じくした同級生から好かれはしませんでした。やればできることに目覚めたといって喜んでくれた同級生がわずかいましたが、それを知ったのは卒業して随分経ってからです。

たった一人だけ、はっきり謝意を表明してくれた同級生とは同じ班になったことはありません。近所に住むその同級生の家の脇に建つ豚小屋の2階で時々算数を一緒に勉強したことがあったのです。十数頭一緒に産まれる子豚（何頭か出産時に死にます）が次に子供を産むと、何年後かに豚の総数は何頭になるか——。そんな計算と一緒に図解しながらやった覚えがあります。その同級生は長じて大工さんとなり、「あの時の算数は仕事に役立った」と言ってくれたのでした。中越地震の被災家屋の修復に忙しくしているかと思ったのですが、その同級生はすでに大工さんを卒業していました。

小学校卒業に当たり、その教師は中学生用の一冊の分厚い百科事典のようなものをプレゼントしてくれました。けれどその行為は私にとっていたく不快でした。報酬を期待して模擬テストを実施したわけではなく、戦略に対して結果の出る純粋なゲームのようなものだと思っていたからでした（何と嫌味な小学生だったことでしょう！）。グループ学習は私にとって 教育学 というよりは 経済学 に近かったにもかかわらず、リターン に対しては 田植え経済学 の場合とは異なる受け取り方をしたのが不思議と言えば不思議です。

3. 芸術を志望した理由を辿ってみると

意匠課は別ですが、特許庁にも日経BP社にも芸術系大学の出身者は稀でしたから、なぜ東京芸術大学を志望したのか聞かれることがありました。私が入社時、社歴20年近い日経BP社で、芸術系大学出身の記者は建築を除いては（「日経アーキテクチュア」がいましたが、記者の多くは工学部の建築出身でした）初めてだったようです。その なぜ に答えることは、大学に籍を置き、意味のないことではないようにも思えます。教育はそれを

受ける人間にどのような影響を及ぼすのか、という問いでもあるのですから。

新潟県中越大地震の震源地に近い生家ですごした幼年期に、美術を志望させるような環境はまったくありませんでした。田中角栄の選挙地盤で育ちましたので、むしろ田中角栄を生むような土壌に反発さえありました。堅固な越山会の組織づくりにうかがえた 長いものには巻かれる 的な一面を、子供ながら不快に感じていたのです。特に絵が好きなお子でもありませんでしたが、芸術はそうした土壌の対極にあるように思えました。しかし、そんな感覚が志望という形をとるには時間がかかるものです。

生まれたのはNHKのテレビ放送が始まった年でした。小学生の時にテレビで画家のモジリアニとその妻を主人



学生課題作品「校内の自然」から
『『ある場所』での『小さな発見』 in ムサビ』（宮崎健太郎）

公とするフランス映画「モンパルナスの灯」を観て深く心を動かされたのでしょうか、ジェラルド・フィリップが演じたモジリアニの肖像を衝動的に鉛筆で画用紙に描いた記憶があります。つるべ落としと形容される晩秋の日暮れは早く、夕餉を告げる声で我にかえりました。

中学生となって、新しく着任した美術教師が授業で見せてくれたスライドが美術につながる次の体験です。スライドは多々あったのですが、レンブラントの「ユダヤの花嫁」だけが記憶に鮮明です。暗幕を引いて暗い教室で透過光で見る油絵は何とも魅力的でした。みどりという名のその美術教師は、しばしば鮮やかな緑の服をまとい黒縁の眼鏡をかけてやはり魅力的でした。

私に限らず、何人かの生徒が授業とは別に、自発的に描いた水彩画をその教師に見てもらったりするようになりました。そんな中の一枚、私が描いた花瓶に挿された菊が台の上に反射する絵は、どのような経緯からか、女子更衣室の入り口に掛けられました。実体としての花と反射した非在の花とに同じだけの関心があったような記憶が残っています。中学校卒業後、一度もその絵は見えないのですが、社会人となり、中学校合併で校舎が壊されるまで掛かっていたと知らされて、感慨を覚えたものです。

高校は進学校でしたので、1年生では美術の授業があったものの、美術、音楽、書道が選択制だった2年生では美術を選ぶこともなく、クラブ活動で美術部に所属することはありませんでした。長岡市にあった現代美術館で、戦後の抽象絵画以降の作品群を観たのは志望校を決める前後だったでしょう。今はないその地方美術館は当時、最も進んだ美術館の一つだったとは後に知ったことです。

3年生になろうとする春休み、世界史と美術と国語を進路として選択しかねて、最初に相談に行った美術教師の一言で進路を決めたのは不思議と言えば不思議です。新潟大学教育学部が出身の美術教師は、どうせやるなら東京芸術大学を受けなさいと言ったのでした。その時には、予期もせず自分とは縁もゆかりもない大学名でした。

現役で合格しようなど狂気の沙汰と心配されかねないので、受験勉強は秘密でということで、3年生となってからは授業開始前の美術教室がデッサンの特訓場となりました。親が出した進学条件の一つは東京・国立でしたので、他に選択の余地がなかったのも志望校決定の

理由でした。何とも無謀な選択でした。首都圏に住んでいたなら、あるいは現在のように情報があふれる環境にいたら、決して選ばずことのない進路だったと思います。

進路選択の根底には、育った環境への違和感があったようです。その上で、一方に亀井勝一郎の絶望の勤めや小林秀雄の近代絵画論といった中学・高校時代に読んだ書物があり、他方にテレビや美術館、そして直接的には中学・高校の教師の影響があったのでした。絶望には少し説明が必要かもしれません。10代の私にとって、取るに足らない自己とその環境とを否定する絶望の契機として芸術があり、現実機能するデザインに出会うのは特許庁入庁後でした。その当時、美術といえば絵画しか回りになく、デザインを意識することなどないのが地方の一般的実情だったでしょう。

4. 2度の転職のなりゆきとは

大学だより までいましてお待ちください。特許庁時代に始まり、転職後も、新規事業の立ち上げ要員となる機会に恵まれました。度重なると、それが巡り合わせのような気にさえなります。

特許庁を退職出向して、大阪に設立された財団法人国際デザイン交流協会の第1回国際デザインフェスティバルの運営に関わったのが最初でした。原則として転勤のない若輩審査官の退職出向は意匠課にとって異例でした。賞金総額2000万円の国際デザインコンペ、サッチャー英国首相に第一回の特別賞を授与したデザインアワード、エキジビションからなるフェスティバルに関して、内部批判ともとられかねない「反省と展望」を実名で書き、報告書として協会名で関係者に送付したのも異例のことだったようです。

日経BP社に入社できたのは、「日経デザイン」誌創刊のためです。最初の配属は「開発部」で、発刊は入社から丁度1年後でしたので、まさに立ち上げ要員でした。1989年に世界デザイン会議の名古屋開催が決まり、通産省がその年をデザインイヤーと決定したことを受けての新聞社系初のデザイン誌創刊だったのです。

大学3年の年が石油ショックの年に当たり、それだけでなく狭き門の出版社に入れなかった私にとっては、入社試験は最後の敗者復活戦のようなもの。その年に雇用機

会均等法が施行され、「年齢・性別問わず」が新聞の募集広告に明記されたのは幸いでした。国の政策は個々人に直接的で大きな影響を与えることがあります。千家十職に数えられる漆の高名な女性作家が、正式な継承者と認められたのも同じ1986年でした。それを本人から聞いてびっくりしたのをよく覚えています。

その募集の切り抜きを持ってきてくれたのは、出身校を同じくする意匠課のはるか年上の先輩審査官です。「この仕事の方が向いているよ」と言っていることですから、審査官に向いているとは思われていなかったはず。しかし、記者となれたのは意匠審査官および国際デザイン交流協会勤務という、特許庁が私に与えてくれたキャリアのお陰であることは言うまでもありません。公務員とジャーナリストと、いわゆる 職業 は異なりますが、専門はいずれも デザイン です。

大学でも新設学科の立ち上げに遭遇しました。短期大学部を改組してデザイン情報学科および芸術文化学科を新設することが決まり、開設13カ月前に着任しました。きっかけは 取材 でした。取材で知り合った同大教授が学長補佐の任にあり、学内研修会の講師に推薦するに当たって理事長が首実検、というのが直接の動機だったと後で知りました。

学科新設が喫緊の課題だった理事長は、その最初の対面で打ち合わせなしに着任を持ち出したのです。「日経デザイン」の創刊10周年を迎えた直後の出来事で、私にとっても区切りだったのでしょうか。その場で即答しました。自由に編集をさせてもらいはしていましたが、雑誌である限りストックというよりフローの情報発信に終始せざるを得ないことに、ストレスがあったのだと思います（ほんとに贅沢なストレスですが）。編集長以上の管理職に展望を見出せないことも転職の動機にありました。33歳の時の、10歳以上も年下の応募者と4度の試験を競うといった事態はもう御免だ、と思っていたのも即答の理由だったかもしれません。当時の社長は、「それはいい選択だ」と言って、二度まで慰留することはありませんでしたね。

研究者も教育者も一度も志向することなしに教員となったのは、そんな事情でした。大学の非常勤講師歴はありましたが、採用する側はその教歴ではなく審査官と編集長というキャリアを足し算して、新設学科立ち上げ要

員として声をかけてくれたのでしょうか。ですから、研究者としても教育者としても自覚が希薄なままに大学に籍を移してしまいました。編集という手法で研究にアプローチし、学生を姿を変えた読者として授業を構成する。そんなささやかな心づもりがあっただけでした。

官産学のオンナ。これが冗談半分の私のキャッチフレーズです。今年、文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の選定委員として同席した神戸女学院の女性学長と自己紹介し合った折、「あなたのような学生を育てたい」と真顔で言われてしまいました。私のキャリアパスは意志というよりはほとんど偶然に左右されての結果です。捨てるのをためらうものなどなかったにもかかわらず、石橋を叩いておずおずと渡った幾つかの橋でした。ですが、変化の激しい社会にあって、職場に固執する必要などそんなにはないのだというサンプルにはなるかもしれません。しかし素手で橋を渡るのはやっぱり怖い。「デザイン」と「情報」、あるいは「造形」と「言語」が、私にとっての 手袋 のようなものなのかもしれません。

大学に着任した年の夏、高校1年生の姪と一緒に念願のインド旅行に出かけました。インド社会に深く心を動かされた姪はその後、国際協力を仕事とするべく法学部政治学科に進学し、翌年には大学を1年休学して米国、インド、南アフリカ等で活動する国際的なプログラムに参加。その翌年の夏に再度、目的のインドでインターンシップを経験したのです。この個人的体験が、教えるというより選択肢を与える という私にとっての大学教育のひな形となりました。

5. とりあえずの「大学だより」

回り道が長すぎました。いよいよ「大学だより」です。この欄の執筆者には、「授業は週何時間しているのですか」、「学生と接していると若返るでしょう」との質問が投げかけられるようです。同じ質問が私に投げかけられたとしても、着任時には授業もなければ学生もいませんでした。「新設学科準備室」が所属で、まだ学科がなかったのですから当然です。翌年に学科が開設されても、授業は学年進行ですから3年目までは、勤務規定にある「5コマ・週3日出講」するほどの授業担当はなかったのです。



学生課題作品「校内の自然」から
「片隅に見つけた静かな『和』の空間」(小椋雅俊)

新設のゆえのさまざまな活動を求められはしましたが、教員らしい勤務形態となったのは着任4年目です。

私立大学ですから、国公立のデザイン系教員に比べ一人当たり学生数は2~3倍ですし、大学院の専任教員を置かないために、実際に担当するコマ数は現在、規定をはるかに越えています。短期大学部改組を経て、2年制通信学部を4年制に変えたことによる、通信教育の指導も加わっています。年間を7期に分けての学科を越えた短期の集中演習などもあり、週単位の担当コマ数は複雑で一言では答えられません。若返ったかどうか。それも別の意味で、本人には答えようのない質問です。

もちろん日々の時間割は変わりました。深夜作業は自宅以外ではまずしなくなりました。新聞系唯一のデザイン誌ということで編集者時代からデザインコンペの審査

員や各種委員は多かったのですが、一時少し減ったものの、年齢のせいもあってかまた増えています。ただし、編集者時代はどんな依頼も深夜作業で穴埋めすればなんとか引き受けられたのですが、授業に支障のある公職は原則引き受けません。補講で代替できる前期・後期各1回以外は対応できないのです。ですから「休講」という言葉とは無縁です。その原則を崩したら歯止めがきかず、教員として失格してしまいそうだからです。

私が属する デザイン情報学科 は、英文名では Department of Design Informatics となっています。詳しく説明はしませんが、素手にはめる私の手袋が デザイン と 情報 ですから、なんとかやっていると学科なのです。大学は研究・教育の場です。私個人の執筆活動についてはまとまった書名のみ以下に示します。学科が船出して少し落ち着いて以降、毎年なんらかの成果を出そうとはしているのですが、必ずしも思うようにはいきません。

『工業所有権標準テキスト 意匠編』(共同編著書、2001年、特許庁)『デザイン 12の扉』(編著書、2001年、丸善)『折り梅』プログラム(編著書、2002年、エッセンコミュニケーションズ)『笹原由理第二詩集 夜の声/夜の場所』(編集および解説執筆、求龍堂刊、2002年)『魔の山 中川幸夫作品集』(編集および『年譜・作品歴・書誌』作成、求龍堂、2003年)『カラー版 日本デザイン史』(共同監修・共同執筆、美術出版社、2003年) 編集的手法でアプローチした長い論文の発刊をご報告できるのは少し先となりそうです。

2001年度に引き受けたのが、高校生および大学生に配布する『工業所有権標準テキスト意匠編』の企画・編集分科会委員長の任でした。現在はシリーズ『産業財産権標準テキスト』としてガイドビデオと共に無償で希望校に配布されているものですが、武蔵野美術大学では、専門の弁護士・弁理士の方が担当する知的財産権の授業で配布すると同時に、「デザインマネジメント論」の副読本として私自身も利用しています。

そのシリーズには義務教育向けの冊子も含まれることはどなたもご存知でしょう。デザイン教育は義務教育から始めるのが望ましいというのが関係者の願望です。知的財産教育もそうありたいという合意の元での小学生向け発明教本の配布であるはずで、内容には吟味が必要

でしょうが、〈気付き〉のきっかけは早いにこしたことはないのです。

次に教育について述べます。いくつかある演習系の科目では〈メディア編集〉系を、講義科目としては〈デザインマネジメント〉系を担当しています。知的財産関連の授業は、〈兼任〉と通称する学内他学科の〈デザインマネジメント〉の半期の講義に3回ほど盛り込んでいるだけなのです。その内容を説明する必要はないでしょう。美術大学の学生の知的財産権教育はデザインマネジメントの一環として導入した方が早い理解を促すことができる。そんな思いがあつての授業ですが、やり方次第であるのは言うまでもありません。それに大学院授業、4年制通信課程の指導、他大学での授業が加わります。

美術大学でデザイン情報学を学ぶ学生の志向を示すアンケートがありますので一つだけ紹介しましょう。今年度10月26日、財団法人日本産業デザイン振興会が主催するグッドデザイン賞2004（かつてのGマーク選定）の大賞がNHKの教育番組「ドレミノテレビ」と「にほんごであそぼ」に決まりました。デザイン情報学科の1年生にその2つの番組を審査用DVD版で視聴させた後で、自分が最も興味をもつ表現要素を次の4つから選ぶというのが設

問です。その4つとは、言語、造形、音楽、身体としました。結果は意外にも、言語（31人）、造形（16人）、身体（13人）、音楽（11人）、その他（5人）でした。第一位はなんと言語だったのです！ メール習慣の影響大と言えるかもしれません。こうした学生を日々相手にしているのです。

6. 大学教員に舞いこむ〈公職〉

それでは大学教員にはどのような〈公職〉が舞いこむのかを説明しましょう。企業からの依頼、単発の講演などは別として、現在継続中のものを数えると18になります。読み飛ばしていただいて結構なのですが、大学教員という仕事の一端を分かっていたくために、列記してみます。

NHKハート展詩選考委員（NHKほか、1994年度—）、かわさき産業デザインコンペ2002年度審査委員（川崎市、1996年度—、2001—2003年度委員長）、東京都伝統工芸品産業振興協議会委員（東京都、1997年度—）、グッドデザイン賞審査副委員長（日本産業デザイン振興会、2002年度—、委員は1998年度より）、日本ディスタンスラーニン



学生課題作品「校内の自然」から
「あいだのところ」(丸山さくら)

グ学会理事（1999年度—） 芸術工学会会計監査役（1999—2002年度理事、2003年度—） 富山県デザイン懇話会世話人（2000年度—） 山梨県広聴公報戦略アドバイザー（山梨県、2000年度—）

ここまでが前世紀、以下は21世紀に入ってから始まったものです。ジャパン・テキスタイル・コンテスト審査員（愛知県一宮市、2002年度—） 燕市物産デザインコンクール審査委員（新潟県燕市、2002年度—） 桑沢デザイン賞選考委員（桑沢デザイン研究所同窓会、2002年度—） 岩手県工業技術研究推進会議委員（岩手県工業技術センター、2003—2004年度） 東京芸術大学美術学部デザイン学科非常勤講師（東京芸術大学、2003年度—） 東京都新しい大学構想新分野検討部会委員（東京都大学管理部、2003年—） 札幌市立大学設置準備委員会デザイン専門部会委員（札幌市企画調整局大学設置準備室、2003年—） 平成16年度「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」選定委員（文部科学省、2004年度） 札幌スタイル・デザインコンペティション審査委員長（札幌市、2004年—） 産業構造審議会臨時委員（経済産業省、2004—2005年）

会合は年1回から10回ほどまでと様々ですが、授業に支障のない限り引き受け出席するようにしています。一般大学にメディアとデザインを合体したようなコースが、学部あるいは大学院レベルで続々と開設されつつある現在です。そうした新コースの立ち上げにもいくつか関与しています。長く続けているNHKハート展とグッドデザイン賞は、幾分PR担当のようであって、取材を受けたりテレビ出演の機会もあります。

編集者時代に取材で出会った方々からの依頼が多く、断るわけにはいきません。また、そうした審査や委員会の場では新たな体験ができ、密度の高い情報収集の機会となることも引き受ける理由です。日本IBMが社会貢献事業として開催している会議体の一つである「富士会議」に数年間招待された経験がありました。企業であれ個人であれ、何かに役立っていると実感できることは幸いです。未知の人々と出会うのは心躍る出来事でもあります。

この一文はなんとか「大学だより」となったのでしょうか。ビジュアルとして、今年の3年生前期の「プリントメディア編集ゼミ」の課題作品の一部を掲載して 大学紹介 とします。6週連続の「ワークショップ課題」は、「風景描写／見ることの困難」、「立ち話採集／リサ

profile

森山 明子（もりやまあきこ）

1953年1月	新潟県に生まれる
1975年3月	東京芸術大学美術学部芸術学科卒業
1975年4月	特許庁入庁し、1979年意匠課審査官となる
1982年9月	財団法人国際デザイン交流協会企画調整課長
1983年12月	通商産業省貿易局検査デザイン課課長付
1984年1月	特許庁意匠課審査官
1986年7月	日経マグローヒル社（現・日経BP社）に入社し「日経デザイン」創刊に関わる
1988年3月	「日経デザイン」副編集長
1993年3月	同誌編集長
1998年3月	武蔵野美術大学教授 日経デザイン編集顧問
1999年4月	同大学デザイン情報学科教授となり現在に至る
2003年4月	東京芸術大学非常勤講師
2004年4月	九州大学客員教授



ーチの始まり」、「みんなのベスト100冊／ダイアグラム」、「私書体／わたしが文字に出会ったとき」、「物語の始まり／天地創造・引用の作法」、「追悼の達人／誘惑の言語」と続いたのですが、ここに掲載する「風景描写／見ることの困難」は「校内の自然」をモチーフとしたものだからです。

描写、論述、表現のための言語と、それに対応する視覚言語とを自在に扱えるようになることを目指すワークショップです。課題は履修生分を各自がコピーして配付し、相互評価の対象となります。学生同士の評価は鋭く、授業評価と同様、教えられることが多いものです。

読者諸氏が、未知なる美術大学の校内に迷いこんでくださることを願っています。